様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月１１日現在

機関番号：４７１１８
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１７３０６５９
研究課題名（和文）　第二次世界大戦前における日本とタイの子どもの交流に関する研究

研究課題名（英文）　Research on the mutual visits by the Boy Scouts between Japan and Thailand before World War II

研究代表者
圓入　智仁（ENNYU TOMOHITO）
中村学園大学短期大学部・幼児保育学科・准教授
研究者番号：00413617

研究成果の概要（和文）：①1935 年にタイのルークスア（ボーイスカウト）は日本の少年団に、友好親善の証として 2 頭の象を贈った。②1929 年のルークスアの訪日には大倉財閥の大倉喜七郎が金銭面で援助した。約 2 週間の滞在中、神戸から東京に至る間で日本の文化を見聞きし、各地で子どもたちと交流した。③1925 年、発足当初の海洋少年団を海軍が観察、記録していた。ここには「海軍思想」の普及には有効だと評価しつつ、団員の出身階層、活動内容、軍部との接続などに関する意見があった。

研究成果の概要（英文）：In 1935, Siamese Luuksua (Boy Scouts) presented two elephants to Japanese Shonen-dan (Boy Scouts) as a proof of mutual friendship. In 1929, Siamese Luuksua came to Japan for about 2 weeks, supported by Kihichiro Okura, the Okura combine (zaibatsu). During their trip from Kobe to Tokyo, they observed Japanese culture and had exchanges with Shonen-dan in various places. In 1925, Naval officers observed and recorded the activities of Tokyo Kaiyo Shonen-dan (Sea Scouts) established in the previous year. They reported that Kaiyo Shonen-dan was effective for the popularization of 'Naval thought' and gave opinions about member's class, activities, connection with the Navy, and so on.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：社会教育、タイ、子ども、国際交流

１．研究開始当初の背景

学校外の地域社会における子どもを対象とした組織的な教育活動は、各国や地域で行われているにもかかわらず、歴史研究の対象とされることがほとんどなかった。

20 世紀初頭、英国で独自の組織論、方法論をもつ学校外の子どもの社会教育組織が結成された。ボーイスカウト運動である。この運動は欧米や日本と、その植民地に瞬く間に伝わった。ソ連のピオネール、ドイツのヒットラー・ユーゲント、イタリアのバリラも、ボーイスカウトの組織論や方法論を導入し

ているとされる。学校外の地域社会において、子どもを組織し指導する体制として、ボーイスカウトの組織論や方法論は、為政者にはとても魅力的であったと考えられる。

研究代表者は日本と、比較地域として同じアジアの独立国タイに着目して、20 世紀前半に、子どもの組織的な社会教育が普及した過程、各地での活動の特徴や政治的背景に関心を持って研究を進めてきた。もう 1 つの比較地域として、米国統治下における沖縄の子どもの社会教育の活動事例と、そこに込められた米国の意図を研究したこともある。

その際、子どもの社会教育としての組織と活動だけでなく、為政者がどのような意図を持って学校外の子どもを管理し指導しようとしていたのかにも、関心を持ってきた。

その過程で、日本とタイの子どもによる相互訪問などの交流の事実を確認し、両国の交流の実態と、そこに込められた政治的背景を明らかにしようと考えるに至った。国際関係の視点から、子どもの社会教育の歴史を解明する必要を感じたのである。

従来の社会教育学、教育史学、比較教育学における研究蓄積は、子どもに関しては学校教育に着目し、青年や成人に関しては社会教育機関や職業訓練に、主たる関心を寄せてきた。子どもの社会教育に関する歴史的な研究については、組織、機能、役割、政治的背景、諸外国との比較検討、子どもの職業選択への影響などに関する研究が、極めて少ない。研究代表者は子どもの学校外教育としての社会教育の組織や活動に着目し、20 世紀前半の日本と、その比較対象としての同時期のタイや、戦後の沖縄に着目している。一国一地域を理解するだけでなく、それぞれの比較検討も視野に入れながら、国際的な交流にも着目する必要があり、ここに本研究の意義がある。

２．研究の目的

本研究は、20 世紀の日本で学校外の子どもを組織した少年団と、同時期のタイで国王主導によって組織された学校の課外活動としての「ルークスア」の相互交流に着目し、具体的な交流の実態と、交流に込められた両国の政治的な意図の解明を目的とする。

主に大正時代に日本各地で発足した少年団は、1922 年に全国組織としての少年団日本連盟を結成する。ここには、1907 年の英国に起源を持つボーイスカウトの影響を強く受けた少年団や、日本独自の少年団などが集まっていたが、連盟の主導権は前者が握っていた。タイのルークスアも英国のボーイスカウトを起源としており、国際的に見ると、少年団とルークスアは同じ起源を共有していたことになる。

少年団日本連盟はボーイスカウトの世界組織の一員として世界規模の大会に参加していたが、国別の交流を行っていたのは、満州を除けば米国の日系人組織と、タイのルークスアであった。特にタイでは国家が学校教育の一部としてルークスアに取り組んでいたこともあり、日本との交流を国家的事業として位置づけていたようである。

３．研究の方法

本研究では、日本の国立国会図書館、国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所、京都大学東南アジア研究所、ボーイスカウト日本連盟資料センターなど、そしてタイの国立公文書館、国立図書館、チュラーロンコーン大学などにおいて、日本の少年団とタイのルークスアに関する資料を発掘し、内容を確認の上で分析することを、主たる研究方法とする。

４．研究成果

日本とタイの交流に関する本研究を進める内に、日本の少年団の活動実態について、先行研究を踏まえたさらなる研究をする必要性を感じたため、当初の研究計画に加えて、日本の海洋少年団の活動に関する研究にも取り組んだ。

一連の研究成果は、以下の通りである。

（１）日本の海洋少年団の活動に対する海軍士官の所見に関する研究

1910 年代に英国のボーイスカウトの影響を受けた少年団が日本各地で結成され、1920 年代には同じくシースカウトの影響を受けた海洋少年団が結成され始めた。

草創期における海洋少年団を観察した海軍の士官が、海軍省にその所見を提出していた。1925 年、前年に結成された東京海洋少年団の団員と指導者が乗り込んだ、海軍の輸送艦高崎の乗り組み士官によるものである。これまで海洋少年団を含めた少年団に関する、軍部の資料はほとんど確認されていなかった。

高崎乗り組み士官たちは、団員の行動、服装、態度、それに応じる指導者の姿など、艦内での様子を克明にとらえ、軍艦便乗や海洋少年団のあり方に対する提言を行っている。海洋少年団という新しい子どもの組織を見聞きした経験がほとんどないままの所見だと考えられるが、都市部における海洋少年団の特徴でもある、ある程度の階層出身の子どもからなる「富裕者の子弟」の組織だという指摘など、的を射た内容も少なくなかった。

海洋少年団員が高崎に便乗したことに関しては、それが「訓練」なのか「遊戯」なの

かという疑問を呈示している。海洋少年団の指導者としては、そのどちらか一方だけを主張することはせず、訓練と遊戯のバランスを取ることが求められていた。遊戯という側面について、海軍士官としては不満が残ったのであろう。その他、特に運送艦に便乗することへの疑問を呈する意見もあった。

海洋少年団に対する提案の中には、少年団員の選定方法や年齢階梯、訓練、海軍への接続に関する者があった。具体的には、都市部のある程度の階層の子どもに限ることなく、より広い範囲で団員を組織すること、小学生や中学生という年齢階梯に合わせて組織すること、士官としての訓練か兵としての訓練かの検討、そして海洋少年団で訓練を積んだ者に、兵役上の優遇を与えることも含まれていた。

以上のように、高崎乗り組み士官による海洋少年団に関する所見は、当然、海洋少年団を中心に述べている。その一方で、海洋少年団を受け入れた海軍の態度については、次のような意見を提出していた。

（２）1935 年にシャム（現在のタイ）のルークスア（ボーイスカウト）から日本の少年団に送られた象に関する研究

シャムから日本に贈られた 2 頭の象は、同じボーイスカウトという起源を持つシャムのルークスアから日本の少年団に対する、互いの友好親善の証である。両国の公文書を探索する限り、象の寄贈の理由はこれ以外にみあたらない。管見の限り、シャムのルークスアが日本以外のボーイスカウトに象を寄贈したという記録は見つかっていない。象を贈ることについて、シャムの宗務大臣らによる会話から発展した行為であったとしても、その後、宗務省内やルークスアでどれだけ議論をして決めたことなのか、疑問は残る。

少年団日本連盟が今回の象の寄贈についてほとんど前面に立っていなかったこと、連盟の機関誌にも実際に象を受け取るまではほとんど記事を掲載していたかったことの背景には、象の受け入れや輸送などについて実務的あるいは金銭的に、連盟が関わる余地がほとんどなかったという事情があった。象の授受式には、少年団日本連盟が主役になっていることが興味深い。

上野動物園、天王寺動物園は、すでに象を飼育していたのにもかかわらず、そして象舎の増改築費、飼料代や暖房代にかなりの費用が必要になるのにもかかわらず、象の受贈を早い段階で決めていた。象という存在が動物園には必要だったことの証であろう。

1934 年の 5 月上旬には両動物園が象の受け入れを決めていたのにもかかわらず、実際に象が日本に到着したのは翌年 6 月であった。シャム国内での象の輸送、シャムから日本への象の輸送、日本国内の輸送、象使いや付添人など、2 頭の象が両園に到着するには克服すべき課題が山積であった。両動物園は、日本の外務省、在バンコクの日本公使館を通してシャムの外務省、そして宗務省と交渉を進めていた。在日シャム公使館にもシャムの外務省から必要な情報が提供されていた。このような交渉ルートゆえに、象使いの雇用人数など、相互の情報の行き来が混乱する場面も見られた。

（３）1929 年に来日したシャムのルークスア指導者による訪日記録の翻訳

1929 年 7 月 28 日から 8 月 12 日にかけて来日した、シャムのルークスアの引率者だったプラ・サナーポッチャナパークが、帰国後の 1929 年 12 月 23 日、シャム教員協会で発表したルークスアの訪日に関する講演を翻訳したものである。

シャムからの来日を金銭面で援助したのは、大倉財閥の大倉喜七郎であった。

シャムからのルークスア一行は、7 月 28 日に神戸に到着し、市内を見学した。7 月 30 日には大阪に移動した。大阪城やいくつかの工場を見学し、ホームステイも体験した。8 月 1 日には奈良に移動した。翌日、春日大社に参拝した後、京都に向かった。ここでも寺院などを観光した後、8 月 5 日に名古屋に向かった。熱田神宮など市内見学の一環として、日暹寺に参詣した。8 月 7 日の朝、東京に着いて官公庁や新聞社を表敬訪問し、明治神宮に参拝した。8 月 9 日からは山梨県日下部村で開催された少年団日本連盟の合同野営に合流した。8 月 10 日に東京に戻り、シャム協会主催の茶話会に出席するなどして過ごした。8 月 11 日には横須賀港に行って軍艦長門などを見学し、記念艦三笠も訪問した。同日夜には日本青年館で送別の晩餐会が開催された。8 月 12 日、横浜港から筥崎丸にて帰国の途に就いた。なお、プラ・サナーポッチャナパークだけは日本にとどまり、2 週間程度の日本視察を続けた。

1929 年の訪日は、その後の日本の少年団による訪タイ（1931 年と 1937 年）、ルークスアから少年団に対する象の寄贈（1935 年）、ルークスアの指導者の来日（1937 年）といった、一連の相互交流の嚆矢となるものである。戦前の少年団が特定の国と人的交流をしていたのは、満州を除くと、シャム（タイ）のルークスアと、米国の日系人によるボーイスカウトだけであった。

翻訳を進める上で興味深かったのは、1929 年という時代における、日本の文化に関する記述が見られたことである。生魚を食することや銭湯で入浴することへのためらい、日本

の家屋に入る際の靴を脱ぐ習慣への驚きなどは、今でも訪日外国人から聞くことはある。しかし、都市部の家屋が夜間に施錠しないこと、汽車の乗務員や駅の赤帽によるサービス、工場における労働条件、芸者、活弁など、80年余り前の日本の姿には、驚かされる。昭和初期における日本の習俗を再確認するためにも、この冊子は重要な意味を持つと考えている。

訳出した原本と、引用した写真はいずれもタイの国立公文書館に所蔵されているものである。原本はプラ・サナーポッチャナパークがシャム教員協会で発表したものを、夫人が1933年8月27日のプラ・サナーポッチャナパークの葬儀にあたって印刷し配付したものである。

この冊子には、訪日したシャム人の記録だけでなく、シャム人を受け入れた日本の少年団の指導者の記録も掲載した。少年団日本連盟の職員であった臼井茂安による「南国の若人達を迎へて　暹羅少年団訪日旅行日記」（『少年団研究』第6巻第11号、1929年11月、17-22頁）である。この記録を併せて掲載することで、シャムと日本、訪問側と受け入れ側の、両方の記録を読むことが可能となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①圓入智仁、大正末期の海軍士官が見た海洋少年団、中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要、査読有、第44号、2012、pp.121-129。

〔学会発表〕（計１件）

①圓入智仁、シャムから来日した象―戦前の少年団における国際交流―、日本社会教育学会第58回研究大会、2011年9月17日、日本女子大学。

〔図書〕（計１件）

①圓入智仁、九州大学出版会、海洋少年団の組織と活動　戦前の社会教育実践史、2011年、全332頁。

〔その他〕
翻訳、計１件
①圓入智仁訳、非売品、日本に渡ったルークスア　1929年に訪日したシャム人の記録、2012年、全43頁。原典はプラ・サナーポッチャナパーク（本名サナー・ラックシアム）、パートックター　ルアン　ルークスア　パイ　イープン、1933年、全49頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
圓入　智仁（ENNYU　TOMOHITO）
中村学園大学短期大学部・幼児保育学科・准教授
研究者番号：00413617

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：